
曲目解説

富樫 鉄火(音楽ライター) Tekka Togashi

※文中、ブラック・ダイク・バンドは「BDB」と略しました。

10月31日(木) 東京芸術劇場

クイーンズバリー ジェームズ・ケイ作曲

BDBがコンサートの1曲目に必ず演奏する、伝統のマーチ。BDBが誕生したイングランドのクイーンズヘッド村、現在のウエスト・ヨークシャー州「クイーンズバリー」の名を冠した、彼らのテーマ曲である。なおBDBは、いまでもこの地で、週2回、練習を行っている。[約4分]

歌劇《運命の力》序曲 ジュゼッペ・ヴェルディ作曲／ライト編

歌劇王ヴェルディ(1813～1901)が、ロシア帝室歌劇場の依頼で書いたオペラの序曲(ロシア初演1862年、改訂版イタリア初演1869年)。インディオの血を引く青年騎士と、イタリア侯爵令嬢との悲恋を描く。この有名な序曲は、改訂版初演で付加された。冒頭、3つの主音が強烈に響くが、これは初演指揮者の“演出”で、ヴェルディ自身は「これは“祈り”なのだから、もっとおとなしく演奏しろ」と怒った。しかし以後、すべての指揮者が、“強烈”に演奏していまに至っている。[約8分]

奇想曲《ゼルダ》 パーシー・コード作曲

(ホルネット・ソロ:リチャード・マーシャル)

オーストラリア出身の伝説的ホルネット奏者・作曲家で、サンフランシスコ交響楽団のトランペット奏者もつとめた、パーシー・コード(1888～1953)による名曲。ホルネット・ソロが、次々と主題を展開する、一種の変奏曲でもある。

本日のソロは、世界最高のホルネット奏者、リチャード・マーシャル。現在、この曲を演奏する奏者は多いが、彼以上のヴィルトゥオーゾは、まずいない。[約5分]

オール・マン・リヴァー ジェローム・カーン作曲／フリー編

(ドラムス・ソロ:マシュー・リッグ)

1927年初演のブロードウェイ・ミュージカル《ショウボート》の中の曲。アメリカ南部、ミシシッピ川を舞台に芸人たちの人間模様を描く。本来、切々とうたわれるブルース調が、BDBの手にかかるとうなるか、お楽しみに。ドラムス・ソロは、若きパーカッションist、マシュー・リッグ。[約4分]

バリトンのための協奏曲より ピーター・グレイム作曲

(バリトン・ソロ:カトリーナ・マーゼラ)

かつて“スコットランドの天才バリトン少女”と呼ばれた、BDBのバリトン奏者、カトリーナ・マーゼラのために、大人気作曲家ピーター・グレイム(1958～)が書いたコンチェルト。原曲は3楽章構成だが、本日は第2～3楽章が演奏される。

各楽章ごとにイギリスの歴史に残る女性が題材。**第2楽章〈タイド〉(潮流)**は、“イギリスで最も愛されるヒロイン”グレース・ダーリン(1815～42)。灯台守の父とともに、嵐の中、難破船から多くの生存者を救出し、一躍有名になった(現在は、バラの名前で知られる)。主旋律はグレイムの名曲《ハリソンの夢》からとられている。**第3楽章〈トルク〉(回転軸)**は、“女性初のレーシング・ドライバー”ドロシー・レビット(1882～1922)。1906年に当時の女性最速記録(時速146km)を出した。[約11分]

ヒーローズ ブルース・ブロートン作曲

映画『ヤング・シャーロック～ピラミッドの謎』(1985)をはじめとする多くの映画音楽で知られる人気作曲家、ブルース・ブロートン(1945～)が、BDBのために書いた、最新オリジナル曲。

本年2019年は、アポロ11号の月面着陸50周年だった。そこで、乗員だった3人の宇宙飛行士(英雄たち)をイメージして、発射から帰還までをドラマティックに描く。アポロ11号を描いたブラスバンド/吹奏楽曲は多いが、新たな注目曲の登場だ。

全体はおおむね3部構成で、勇壮に始まる**〈イグニション/点火〉**、着陸地点「静かの海」を思わせる**〈トランキリティ/静寂〉**、スピーディーな緊迫感あふれる**〈リターン/帰還〉**とつづく。名手たちのソロもお聴きのがしなく。[約15分]

ウォーキング・ウィズ・ヒーローズ ポール・ロヴァット=クーパー作曲

BDBの元パーカッション奏者で、作曲家でもあるロヴァット=クーパー(1976～)の大人気曲。BDBのために2007年に作曲された。コンサートのオープニング曲として、いまや欠かせない人気ぶりである。人生に影響を与えてくれたヒーローたち(作曲者にとっては、グレイムほかの大先輩たち)とともに歩もうという、壮大なスケールの曲。[約5分]

歌劇《ル・シッド》バレエ組曲より ジュール・マスネ作曲/スネル編

19世紀末にフランスで人気を博したジュール・マスネ(1842～1912)の歌劇《ル・シッド》は、1885年の初演時こそヒットしたが、どの役も歌唱が難しく、歌手を揃えるのが困難となり、次第に上演されなくなった。だが、第2幕のバレエ音楽だけはその後も人気があり、いまではバレエ組曲となって演奏されつづけている。本日は、この組曲から聴きどころを抜粋して。[約4分]

シー・シェルズ・ワルツ フレッド・イネス作曲

(トロンボーン・ソロ:ブレット・ベイカー)

名門ギルモア・バンドなどで活躍した名トロンボーン奏者、本名フレデリック・イネス(1854～1926)が作曲した名曲。イネスは、それまで軍楽隊のワン・パート扱いだったトロンボーンの地位を“ソロ楽器”にまで高めたひと。本日のソロはBDBが誇るブレット・ベイカー。[約5分]

アランフェス協奏曲より ホアキン・ロドリゴ作曲/ボルトン編

(フリューゲルホーン・ソロ:ゾイ・ロヴァット=クーパー)

スペインの作曲家、ホアキン・ロドリゴ(1901～99)による有名なギター協奏曲の、哀愁漂う第2楽章をフリューゲルホーンのソロで。ソロは、前回来日までは「ハンコック」姓だったゾイが、今回は「ロヴァット=クーパー」姓で登場。[約5分]

ユーフォニアム協奏曲より～ドラゴンの巣窟 アンディ・スコット作曲

BDBにならぶ人気バンド、フォーデイズ・バンドの座付き作曲家、アンディ・スコット(1966～)が、同バンドのために書いた《ユーフォニアム協奏曲》の第3楽章。同バンドは、旧名時代の1992年、全欧ブラスバンド選手権で、スパーク《ドラゴンの年》の驚異的名演を披露し、一夜にして伝説のブラスバンドとなった。その「ドラゴン」の名を冠したのが第3楽章(イギリスでは同じ『ドラゴンの巣窟』と題する人気TV番組もある)。

曲はジャズ・テイストあふれる内容で、パーカッションとともに、ダニエル・トーマスのユーフォニアムが大活躍する。[約5分]

キャッツ・テイルズ ピーター・グレイム作曲

グレイムは、かつて、ニューヨークで過ごした時期があり、ジャズ・ミュージシャンたちが「キャッツ」と呼ばれていることに強い印象を覚えていた。それをヒントに、敬愛するアメリカの作曲家3人に「CAT」の3文字が入ったタイトルを冠して3楽章のオマージュに仕立てた、ユニークな組曲。

I 〈カタロニア〉 Catalonia

『大脱走』『荒野の七人』で知られる映画音楽作曲家、エルマー・バーンスタイン(1922～2004)に捧げる。西部劇を思わせるソロで開始し、テンポアップしてからは、レナード・バーンスタインの香りもかすかに重なる。

(ソロ:ゾイ・ロヴァット=クーパー、シボーン・ベイツ、アリソン・チャイルズ、サミー・ラトゥス)

II 〈キャットウォーク〉 Cat walk

『ティファニーで朝食を』（ムーン・リヴァー）、『刑事コロンボ』などで知られるヘンリー・マンシーニ（1924～1994）に捧げる。曲想のヒントは、猫と同族の豹（『ピンク・パンサー』のテーマ）。

III 〈スキヤット!〉 Scat!

名サクソフォン奏者、ソニー・ロリンズ（1930～）に捧げる。トロンボーン、コルネット、ヴィブラフォン、ドラムスがソロを展開する（ソロ：リチャード・マーシャル、ブレット・ベイカー、ローガン・ハートレイ）。

なお、グレイアムは、後年、第4～5楽章を加筆している。〔計約8分〕

シャイン・アズ・ザ・ライト ピーター・グレイアム作曲

グレイアム作品のなかでも常に人気上位に入る有名曲。前曲同様、ニューヨーク在住時、現地の救世軍ブラスバンドのために、1996年に作曲された。世界中のブラスバンドが、コンサートやコンテストで演奏し続けている、いまや古典的な名曲。

曲は、救世軍の讃美歌〈It's A Great Day, the beautiful〉〈Candle of the Lord〉〈The Light Has Come〉のモチーフを中心に展開する。

ロウソクの小さな光が少しずつ集まり、曲名「光となりて輝かん」とおり、やがて巨大な光に展開するクライマックス部分は、吹奏楽や管弦楽では達成できない、ブラスバンドならではの感動的な表現。テロや貿易摩擦で、世界中で対立が激化する2019年に、なぜBDBが、本曲を大トリに持ってきたのか、その想いを感じていただきたい。〔約9分〕

11月2日(土) すみだトリフォニーホール

行進曲《自由の鐘》 ジョン・フィリップ・スーザ作曲／チャイルズ編

イギリスでは、本曲が流れると、客席から笑いがおきる（はず）。BBC放送で、1969～1974年にオンエアされたブラック・コメディ「空飛ぶモンティ・パイソン」のオープニング・テーマ。日本では1976年より、テレビ東京やNHK-BSで断続的に放映された（日本版コーナーで、タモリがイグアナの真似や4国語麻雀でTVデビューした）。

……もちろん本曲は、アメリカのマーチ王、ジョン・フィリップ・スーザ（1854～1932）の名マーチ。フィラデルフィアの「自由の鐘」を題材にした曲だが、もともとイギリスでは、BBCのスポーツ番組のテーマ曲として知られていた。〔約4分〕

歌劇《ナブッコ》序曲 ジュゼッペ・ヴェルディ作曲／ローリマン編

イタリアの歌劇王、ジュゼッペ・ヴェルディ（1813～1901）の出世作。「旧約聖書」を題材に、バビロニアとヘブライの対立と恋を描く。

中間部で流れるゆったりした旋律〈行けわが思いよ、金色の翼に乗って〉は、ヘブライ人たちが故国への熱い思いを歌う名曲。初演時、オーストリアの支配下にあったイタリア人たちの愛唱歌となり、いまでも“第二の国歌”としてこれを歌えないイタリア人は、いない。〔約8分〕

メロディー・オブ・ザ・ハート テリー・カムジー作曲

（コルネット・ソロ：リチャード・マーシャル）

国際救世軍バンドやニューヨーク救世軍バンドなどの首席コルネット奏者だったテリー・カムジー少佐（1935～2011）によるコルネット・ソロの名曲。最初はゆったり始まるが、やがて加速し、超絶技巧の披露に至る。カムジーはコラムニストとしても有名だった。そのせいか本曲も、どこか「語りかける」ような優しさと楽しさがある。

本日のソロは、現代最高のコルネット奏者、リチャード・マーシャル。〔約6分〕

《ウィンドウズ・オブ・ザ・ワールド》より ピーター・グレイアム作曲

イギリスの人気作曲家、ピーター・グレイアム（1958～）が、世界6か国のメロディとリズムをピックアップし、6部で構成したユニークな“世界音楽紀行”。王立ノルウェー海軍バンドのために書かれた。本日は、ここから3曲を抜粋演奏する（残念ながら日本編は演奏されない）。

I 〈アマゾニア〉…アマゾン

II 〈ケルティック・ドリーム〉…アイルランド周辺（バリトン・ソロ：カトリーナ・マーゼラ）

III 〈ドラムス・オブ・サンダー〉…アフリカ・サハラ砂漠

〔計約10分〕

ケルティック・プロミス フィリップ・ハーパー作曲

（テナーホーン・ソロ：シボーン・ベイツ）

BDBのよきライバルであるコーリー・バンドの音楽監督で作曲家、フィリップ・ハーパーが、2003年に、同バンドのテナーホーン奏者、オーウェン・ファーのために書いた（作曲者自身もテナーホーン奏者だった）。どこか日本の唱歌のような、懐かしさを覚える不思議な曲である。テナーホーン・ソロは、名手シボーン・ベイツ。ライバルの曲でも、いい音楽であれば積極的に取り上げて演奏する、BDBの懐の深さが感じられる選曲である。〔約4分〕

交響詩《ダイナスティ》 ピーター・グレイラム作曲

今回の日本公演で注目度No.1の1曲! しかも本年の全英オープン選手権の課題曲。伝説的
コルネット奏者、ハリー・モーティマー(1902~92)の家族をモチーフに、その業績を称える
交響詩。彼は、父が指揮者、2人の弟もコルネット奏者。ハリーは、指揮者としてもフォーデンス・
バンドなどを率いて、全英選手権や全英オープンで数えきれないほど優勝している。そんな
ファミリーの歴史を「王朝」(ダイナスティ)にたとえて描く、音楽による大河ドラマである。

内容は、ハリーの有名な自伝『オン・ブラス』に即しており、I〈ハリー〉(出生)、II〈戦争〉
(父の出征。口笛の旋律は、第1次世界大戦時、イギリス軍の間で大流行した軍歌《遙か
なるティペラリー》)、III〈劇場〉、IV〈旅〉、V〈ともに〉(家族の黄金時代)、VI〈さようなら〉
(父の死)、VII〈アーメン〉の7部構成。

ブラスバンド曲は、クライマックスで超絶技巧の細かいパッセージが大炸裂することが
多いが、本曲は、温かさや敬意をじっくりと表現する。これもまた、ブラスバンドならではの
表現で、グレイラムの新境地ともいえよう。[約14分]

ホライズン ポール・ロヴァット=クーパー作曲

BDBの元パーカッション奏者で、いまや大人気作曲家でもある、ポール・ロヴァット=クーパー
(1976~)がラトビー協同組合ブラスバンドの創立100周年記念に委嘱され作曲、2006年に
発表した。作曲者お得意の明るくてスピーディな曲想が疾走する。まさにオープニングのために
書かれたような爽快な響きで後半の幕が開く。なお、彼は、フリーゲルホーンのゾイ・
ロヴァット=クーパーさんと“職場結婚”されております。[約5分]

愛の想い アーサー・プライヤー作曲/ウィルキンソン編

(トロンボーン・ソロ: プレット・ベイカー)

《口笛吹きと子犬》の作曲でも知られる、スーザ・バンド所属の天才トロンボーン奏者、
アーサー・プライヤー(1869~1942)が書いたワルツが原曲。後に、彼のアドリブ・スタイルも
取り入れて、トロンボーン・ソロ曲に仕立て直された。BDBが誇る名奏者、ブレット・ベイカー
の妙技をお楽しみあれ。[約4分]

舞踏会のバス ロイ・ニューサム作曲

(チューバ・ソロ: ゲヴィン・セイナー)

かつてBDBに所属していたこともある、コルネット奏者で指揮者・作曲家でもあったロイ・
ニューサム(1930~2011)が書いた、なんとも楽しい、かつ超絶技巧を要するタンゴ・ワルツ。
タイトルはアンダーソンの名曲《Belle of the Ball》(舞踏会の美女)をパロディにした

《舞踏会(場)のバス》。緑の下の力持ちバス(チューバ)が主役になる珍しい1曲。[約5分]

春の日の花と輝く シモーネ・マンティア作曲/チャイルズ編

(ユーフォニアム・ソロ: ダニエル・トーマス)

アメリカの伝説的トロンボーン/バリトン/ユーフォニアム奏者、シモーネ・マンティア(1873~
1951)が、有名なアイルランド民謡を、ユーフォニアム・ソロ変奏曲に編曲した、ウルトラ級の
超絶技巧スコア(ほとんどサーカス?)。マンティアは、前々曲、アーサー・プライヤーのバンドで
副指揮をつとめたこともある。本日みなさまが聴くダニエル・トーマスのソロはまさに“神
ユーフォ”なので、ご承知おきを。[約6分]

映画「ハリー・ポッター」より ジョン・ウィリアムズ作曲/ダンカン編

2001年から総計8作が公開された大ヒット映画から、主要テーマをダイジェストで。[約3分]

映画「007 ユア・アイズ・オンリー」より ビル・コンティ作曲/バリー編

(フューチャリング: ゾイ・ロヴァット=クーパー、シボーン・ベイツ、アリソン・チャイルズ、サミー・ラトウス、カリーナ・マーゼラ)

1981年公開の映画の主題歌(シーナ・イーストン)を、女性奏者をフィーチャーして。これ
だけの女性名プレイヤーが揃ったブラスバンドは、世界にもそうはない。[約4分]

映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」より クラウス・バデルト他作曲/ロバーツ編

2002年より計5作が製作された人気ディズニー映画から。主な楽曲は、『バックドラフト』
(料理の鉄人)などで知られるハンス・ジマーが書き、同じスタジオに所属するクラウス・
バデルトが監修協力して完成した。[約4分]

交響詩《ローマの松》より オットリーノ・レスピーギ作曲/スネル編

近年の日本公演の最終曲は、必ずブラスバンド・オリジナルの大曲で締めていたBDBが、
なんと、吹奏楽の人気曲でもあるクラシック名曲を持ってきた!

イタリアのオットリーノ・レスピーギ(1879~1936)が、ローマ3部作の第2作として1924年
に発表した。ローマの松の名所4か所を取り上げ、かつての古代ローマ帝国時代の栄光を
回想するスペクタクル音楽。本日は、ここから2つの楽章が演奏される。

第1部〈ボルゲーゼ荘の松〉

広大なボルゲーゼ公園で、松並木の周囲をグルグル回って遊ぶ子どもたちの姿。

第4部〈アッピア街道の松〉

霧深い早朝、ローマを南北に結ぶアッピア旧街道の石畳を、古代ローマの大軍団が、彼方から行進してくる。軍勢は次第にその全容をあらわし、朝陽を浴びながら、カピトレ丘へ登ってゆく。

このクライマックスをBDBの演奏で聴くと、ブラスバンド芸術の美しさ、迫力、壮大さが骨の髄まで浸み込んでくる。そして、なぜ彼らが、本曲を最後に持ってきたのか、その理由と自信も十二分に伝わってくるはずだ。[計約9分]

◆「ブラスバンド」とは？

「ブラスバンド」とは、「サクソルン属」の金管楽器を中心とした、管打楽器アンサンブルのことです。主にイギリスなどのヨーロッパで盛んなスタイルで、吹奏楽とは異なり、トランペットやフレンチホルンなどは使われません。

「サクソルン」とは、サクソフォンの発明者、アドルフ・サククス(1814~94)が開発した、やわらかい音色の金管楽器です。低音から高音まで6種類ほどがありました。ここから派生したといわれている、音色の近い楽器がコルネット、フリューゲルホーン、テナーホーン、バリトン、ユーフォニアムなどで、これらを総称して「サクソルン属」と呼んでいます。ただし、おおもとのサクソルンは、いまでは使われません。

英国式では、総計28名+αが標準編成です。コンテストや作曲・編曲も、この編成を前提に行われます。

彼らは、半円形や台形で向かい合い、ギッシリ並んで演奏します。客席に向かって吹くと、音が強くなりすぎてしまうので、音を舞台上でブレンドさせて、柔らかい響きにするためです。また、昔のブラスバンドは、工場や炭鉱などの労働者によって結成されていたため、職場の隅の狭いスペースで練習するしかなく、自然とああいいう並び方になったとの説もあるそうです。

(富樫鉄火)